

# ソードアートオンライン 《Sword Brave》

サトマツ

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

最初に書いてみようとした作品です。どうぞ温かく見守ってください。  
一応マザーズロザリオまで書こうかと思っています。

リンクスタート!!?

目

次



# リンクスタート!!?

俺、相坂理玖は早く時間が来ないかとソワソワしていた。

「早く時間が来ないかな〜」

と言いながら部屋をウロウロしていました

「落ち着きなよ」

と呆れた顔で妹の相坂愛理に言われてしまった。

妹とは2つ年の離れた妹だ。

「なんでそんなにソワソワしてるの?」

「妹によくぞ聞いてくれた。お兄ちゃんは今S A Oというたつた1万本しか出てないゲームができるんだぞ。

しかも、その中で1000人しかできないベータ版もやっていたんだぞ。」

「それってすごいの?」

妹はゲームはあまりしないほうだからこの凄さが分からないらしい。

もつたいないな全く。

「ああ凄いとも、ベータ版は確か宝くじよりも当たりにくいといわれていたんだぞ。」

「ふくん、どうでもいいけど静かにしてよね。」

「わかった、善処しよう。」

とこのやりとりをしているうちに

「おっ、時間だな」

と言つてソードアートオンラインをセットしてナーヴギアをかぶつてベットに横になつた。

そして幼馴染の事を思い出しながら俺はこう言つた。

『リンクスタート!』

そうしたいろいろいろ画面が出てきていろいろな設定が出てきてデータテスト時に使用したデータを使いますかと出てきたのでもちろんYesにした。

そうすると辺りが見えてきた。

「やつとここに来た!」

と感心している時に後ろからだれかがぶつかってきた。

「あつすまん」

と言いながら走つて行つた。

なんだよ人が感心しているときにぶつかってやがつてと思ひながらフィールドにむかつた

———草原———

「よし、レベルが上がった。どんどん倒していく。」

と言いながら辺りを見渡していると2人のプレイヤーがいた。

1人はぶつかってきた人でもう一人は知らない。

と考えているとぶつかってきたやつが話しかけてきた。

「やあさつきは本当ごめんな」

「いや別にいいよ、ぼーっとしていた俺も悪い」

「そつか、俺の名前はキリト そこの人はクライインだ。」

「おう、よろしくな」

「俺はアリスだ、こちらこそよろしく。」

「ところで何してたんだよ？」

「レベルを上げてたんだよ。」

「もしかしてオメエベータテスターか？」

「ただけど。クライインはベータテスターなのか？」

「いや違うけどキリトはベータテスターだぜ。」

「あの時いたなキリトっていうプレイヤー。」

「あの時つて?」

「8階層の時に前で戦っていたよな。」

「確かにそうだけど、アリスつていたつけなあ?」

「いやキリトは知らないはずだよ、俺後ろの方で戦つてたし。」

とたわいない話をしているといきなり大きな鐘の音がなつていきなり青く光つて始まりの町の広場に転移された。